


Zambia

学校名：埼玉県立松山高等学校

氏名：大野 直知

[担当教科：地理歴史(地理)]

● 実践教科等：世界史B

● 時間数：5 時間

● 対象生徒：高校 1 年生

● 対象人数：35 人×4クラス

1 単元名「アフリカの植民地化と独立後の課題」

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- (1) 現代のアフリカ諸国が抱えている「貧困」という問題について、その原因を帝国主義列強によるアフリカの植民地化以後の歴史的過程から理解する。【多面的、総合的に考える力】
- (2) 「貧困」の解決に向けた国際社会の役割と自分自身の関わり方を主体的に考える。【未来像を予測して計画を立てる力】【進んで参加する態度】
- (3) 他者との意見交換や話し合い活動を通じて問題を解決しようとする姿勢を身につける。【コミュニケーションを行う力】【他者と協力する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1) 教材観

本単元では、帝国主義列強によるアフリカ分割と独立の歴史、及び独立後のアフリカ諸国が抱えている問題を理解させた上で、それらの問題解決に向けた取り組みを考察させる。これは、現行の学習指導要領(2009年3月告示)に示される「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」という世界史Bの目標を体现することをねらいとしている。

本単元は、主に学習指導要領に示される世界史Bの内容「(5) 地球世界の到来」「ア 帝国主義と社会の変容」に位置づけられるが、同じ大項目のアフリカに関する内容もまとめて通史的にしたものである。そのため、まず本単元の前において、帝国主義諸国が世界各地に進出して植民地や勢力圏の獲得競争を繰り広げた背景を理解する。そして、本単元を通じてアフリカの植民地化と独立後の課題を学んだ後に、東南アジアや太平洋地域において激化する帝国主義諸国間の抗争が第一次世界大戦につながるという歴史的な経緯を学習する。

(2) 生徒観

本校は男子校で運動部が盛んであり、素直で元気な生徒が多い。授業を実施する4クラスでは、いずれも、この単元以前に知識構成型ジグソー法による協調学習を数回取り入れており、活発な議論を展開していた。この授業で扱うアフリカの植民地化の歴史や国際協力については、中学校社会科である程度学習しているため、「人為的国境線」「モノカルチャー経済」「政府開発援助(以下、ODA)」「青年海外協力隊」といった単語を断片的に覚えているものの、それらの単語を有機的に結びつけて確固たる知識・理解を形成するには至っていないことが予想される。

(3) 指導観

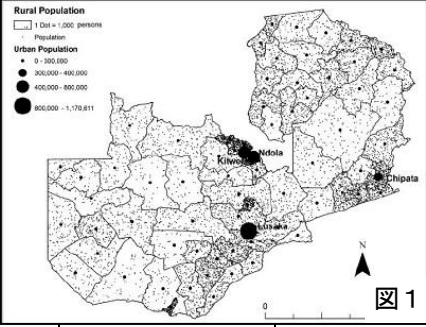
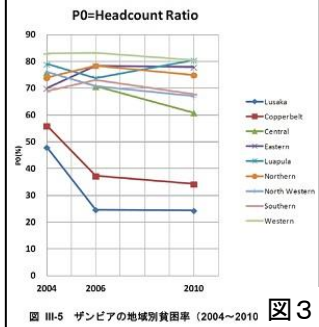
上述の通り、本校の生徒は話し合い等の活動に積極的な生徒が多いことから、ペアワークや知識構成型ジグソー法、グループワークによるダイヤモンドランキングといったアクティブ・ラーニング(以下 AL)の手法を取り入れて、他者との対話を通じて問題を解決させる指導形態を多く導入した。

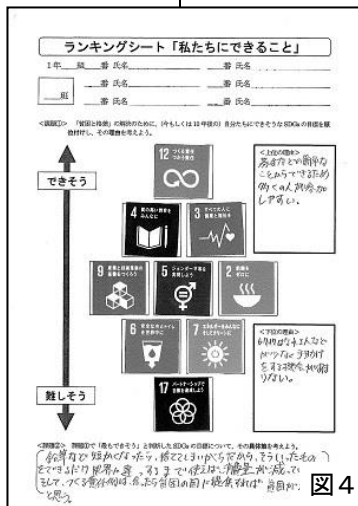
5 評価規準

観点	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
評価規準	●現代のアフリカが抱える「貧困」の問題について、その植民地化以降の歴史的過程から理解し、その知識を身につけている。 ●提示された地図やグラフ、写真から、必要な情報を読み取ることができる。	●アフリカや世界の抱える「貧困」の問題について、その解決への取り組み方を考え、自分なりの意見を持ち、それらを文章にまとめている。	●アフリカや世界の抱える「貧困」の問題を自分事として捉えようとしている。 ●話し合い活動等に積極的に参加している。
評価方法	学習プロセスシート(図8)・ワークシート・ノートの提出状況 定期考査における論述問題		

6 単元の構成

時限	小单元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカの植民地化	自国の経済的利益を優先した列強の帝国主義政策によりアフリカが分割された経緯を説明できるようになる。	●本単元の軸となる問い『『貧困』について、あなたの考えを述べよ』に対する学習前の答えを「学習プロセスシート」に記入し、発表し合う。【一枚ポートフォリオ】 ●アフリカが分割される背景として、19世紀に進んだ内陸部の探検及び植民地化の原則が定められた1884～85年のベルリン会議を知り、英仏独伊を中心とする列強諸国により WWI 前にはエチオピア・リベリアを除くアフリカ全土が植民地になったことを理解する。 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と歴史」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。
2	アフリカ諸国の独立と課題(ザンビアの例)	現代のアフリカ諸国が抱えている「貧困」という問題について、その原因を帝国主義列強によるアフリカの植民地化以後の歴史的過程から説明できるようになる。	●戦後にアフリカ諸国が独立していく過程を理解し、独立後にはモノカルチャー経済により経済基盤が弱いこと、内戦・クーデター等で政情不安となっていることなどから、アフリカ諸国は慢性的な貧困状態にあることを理解する。 ●写真を通じて、ザンビアがイギリスの植民地であったことやその影響で現在でも銅のモノカルチャー経済であること(写真1)、隣国の大国南アフリカ共和国からの輸入に依存していること等を読み取り、極度の貧困状態にある人々の割合が高いこと(写真2)に気付く。【ペアワーク・フォトランゲージ】 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と歴史」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。
		①歴史 ～輸送中の「銅」～  写真1	②社会・経済 ～ノートを縦にして書く生徒～  写真2
3	ザンビアと世界の「貧困」と私たちの未来	ザンビアやアメリカ合衆国の事例から「貧困と格差」の問題は全体的な経済発展によって解決される	●ザンビアの1人あたりのGDPの経年推移を示したグラフからザンビアが急激な経済成長を遂げていることを読み取る。 ●「経済発展に伴ってザンビア社会はどのように変化しているか」という問いの答えを他の生徒との対話を通じて考え、首都ルサカや資源豊富な銅ベルトの都市とそれ以外の地域の農村との間に経済格差が拡

		ものではないことを理解し、持続可能な世界を考えるきっかけとなる。 大してきていることを学ぶ。【知識構成型ジグソー法(図1・2・3)】 ● 様々な図表から世界全体・日本・アメリカ合衆国における格差に気づき、このまま「貧困と格差」が解決されなかった場合にこの世界はどうなるのかを考える。【ペアワーク】 ● 本時の授業内容を踏まえて、「貧困と未来」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。
	 図1	 図2  図3
4	理想的な国際協力の在り方	国際協力とは援助する側もされる側もお互いに利益になる関係性であることを理解し、「貧困と格差」の問題を克服した持続可能な世界を考えるうえでの方向性となる。 ● 日本の国際協力の現状として、ODA や独立行政法人国際協力機構(以下 JICA)の事業について理解する。 ● 「理想的な国際協力とはどのようなものか」という問いの答えを他の生徒との対話を通じて考え、援助する側はされる側が自立できるように配慮しつつ相互に利益になる関係性が理想的であるということに気付く。【知識構成型ジグソー法(図5・6・7)】 ● 本時の授業内容を踏まえて、「貧困と国際協力」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。
5	私たちにできること	「貧困と格差」の問題解決のために自分自身ができることを考え、持続可能な世界に向けて自ら行動できるようになる。 ● 持続可能な開発目標(以下 SDGs)について理解し、既に授業で示したザンビアの貧困を象徴する写真(写真2)や本校が所在する東松山市の名物「やきとり」(写真3)を SDGs の観点から説明する。【ペアワーク・フォトランゲージ】 ● 「貧困と格差」の解決のために、(今もしくは 10 年後の)自分にできそうなものという視点で SDGs の目標を順位付けし、「最もできそう」とであると判断した目標の具体策を考え、発表し合う。【グループワーク・ダイヤモンドランゲージ(図4)】 ● 本時の授業内容を踏まえて、「貧困と自分」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。 ● 「学習プロセスシート」を使って、本単元の学習前に答えた『『貧困』について、あなたの考えを述べよ』という問いにもう一度答え、学習前の答えと比較して自己評価を行い、発表し合う。【一枚ポートフォリオ】



7 授業事例の紹介

小単元名【理想的な国際協力の在り方】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月17日(金)第6限

(イ)実施会場 1年5組教室

(ウ)本時の目標

- 様々な立場や方法による国際協力の事例から理想的な国際協力の在り方を考え、国際協力とは援助する側もされる側もお互いに利益になる関係性であることを理解し、国際協力に積極的に参加する姿勢を身につける。
- 理想的な国際協力の在り方を考えることで、この後に自分自身が「貧困と格差」の解決に向けてできることを考える動機づけとなる。

(エ)指導のポイント

- ザンビアでの研修全体を通して私自身が学んだ「理想的な国際協力の在り方」を生徒にも読み取らせるために、本時の授業の軸となる問いを「理想的な国際協力の在り方」に設定する。
- 現地で活躍する日本人へのインタビュー等、ザンビアでの研修で収集した資料を教材化する。
- ALの一つの手法である知識構成型ジグソー法を用いて、生徒同士の対話によって本時の問いに答えていくように授業デザインする。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	●本時の流れの説明 ●日本の国際協力の現状の説明	○本時の授業テーマをノートに写す	一斉 一斉	●前時の内容の確認 ●重要そうな内容はメモをとるよう指示	
展開 35分	●本時の「問い」を提示【1】	<①「問い」に挑戦> ○既存の知識だけで「問い」に答える <②エキスパート活動> ○エキスパートシートを読み、「問い」に答えるカギとなりそうな部分をチェック【4】 ○同じエキスパート同士の2～3名で、読み取った内容を共有【3】 <③ジグソー活動> ○A～Cそれぞれ1人ずつの3人グループをつくり、互いの情報を共有【3】【7】 ○共有した情報をもとに、「問い」の答えを考える <④クロストーク> ○各班の代表者が「問い」の答えを発表【2】【7】 <⑤「問い」に再挑戦> ○一連の活動を踏まえて、「問い」の答えを完成させる【6】	個人 個人 ペア グループ 全体 個人	●文章で書けない場合には箇条書きや単語だけでも書くよう指示 ●後の活動で他の生徒に伝えられるように、「メモ」欄に自分の言葉でまとめるよう促す ●欠席者がいる場合には適宜メンバーを変更 ●ワークシートにメモをとりながら話し合うよう指示 ●必要があればワークシートにメモをとるよう指示	●話し合い活動等に積極的に参加している(態度) ●話し合い活動等に積極的に参加している(態度) ●自分なりの意見を持ち文章にまとめている(ワークシート)
まとめ 5分	●丸森町プロジェクトと遺伝子組み換えについて補足説明	○「学習プロセスシート」に、「貧困と国際協力」についての自分の考えを書く【1】【2】【6】	一斉 個人	●次時の内容の確認	●自分なりの意見を持ち文章にまとめている(学習プロセスシート)

(4) 参考資料等

- 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』
- 東京大学 CoREF(2015)『協調学習授業デザインハンドブック—知識構成型ジグソー法を用いた授業づくり—』
- 宮城県丸森町「丸森ザンビアプロジェクト 第1回丸森研修レポート」
 <<http://www.town.marumori.miyagi.jp/data/open/cnt/3/3010/1/1-j.pdf>> (2018年1月5日)
- 中島みゆき(2013.8)「アフリカ「10億人市場」の素顔③—「自律」の条件」『メッセージ@pen』(電子版ジャーナル誌)、綱町三田会倶楽部
 <http://www.tsunamachimitakai.com/pen/2013_08_004.html> (2018年1月5日)

8 単元を通じた生徒の反応/変化

「貧困」に対する生徒の記述の授業前後における変化(「学習プロセスシート」より)

【授業前】「貧困によって飢えや病に苦しむ人が多い。これを解決するためにはその国だけでなく他国の力を借りる必要があると考える」⇒【授業後】「貧困が世界的な問題になっていることには、帝国主義の国々による植民地支配やモノカルチャー経済といった歴史的な背景があったと知り、この長い間で大きくなった貧困という課題を自国の力で解決するのはかなり難しいと感じた。そこで、やはり他国の力が必要だと考えた。しかし、先進国が一方的に物資や技術を貧しい国に与えることが理想の国際協力ではないことを知った。相手国が自分たちの足だけで歩んでいけるように、援助する国はその国の文化を尊重し考えながら援助していかなければならないと考える。また、SDGs を達成するためにはもっと貧困について多くの人に認識してもらう必要があると考える。」

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P (計画)	【海外派遣前】 ●生徒の主体的な授業参加を引き出すという点においては、「国際理解教育／開発教育」と「AL」の両者が同じ方向性を持っていることに着目し、以前から授業に取り入れていたALの手法である知識構成型ジグソー法を用いた単元構成を考えた 【海外研修中】 ●高校の世界史Bで実践するため、旧宗主国のイギリスや銅のモノカルチャー経済といった歴史的な要素を含む情報を収集したり写真を撮影したりすることに努めた 【海外派遣後】 ●海外研修では多くの資料と膨大な情報を入手したので、それらの中で最も生徒に学び取ってもらいたいテーマを「貧困と格差」に限定することにした ●生徒に「貧困と格差」というテーマを毎回の授業で意識してもらうため、派遣前研修で学んだ一枚ポートフォリオを使うことにした
D (実行)	●アフリカの歴史から「貧困と格差」を自分事として捉える全5回の授業を実施した ●定期考査において、本単元に関する論述問題(30点分)を出題した
C (検証)	●知識構成型ジグソー法をはじめ、フォトランゲージやダイヤモンドランキングといった手法により、生徒の積極的な授業参加を引き出すことができた ●本単元の授業前後において、「貧困」に関する生徒の記述が増えて学びが深まった ●国際協力の現場で活躍する人たちが持っている問題意識や援助を受ける側の人たちのニーズにまで踏み込んで授業デザインをすることができなかった ●一枚ポートフォリオの記述を評価対象にできなかった
A (改善)	●地理歴史科の他科目や他教科と連携して、様々な視点から継続的に国際理解教育／開発教育を進めていく ●一枚ポートフォリオを他の単元で実施し、ルーブリックを事前に作成して評価対象とする

10 教師海外研修に参加して

ザンビアでの研修では、JICA スタッフなど現地で活躍する日本人や援助される側であるザンビア人の生の声を聞いたり、観光旅行では絶対に立ち入ることのない農村で実際に営まれる生活を見学したりと、貴重な経験をさせてもらった。国内の研修では、国際理解教育／開発教育を実践する手段として様々な授業法を紹介してもらい、それらを自分自身の授業実践で実際に使うことができたことが私自身の大きな成果である。本研修で得た視点や授業法を使って、少しでも生徒の世界へのハードルを下げられるように、引き続き国際理解教育／開発教育を実践していきたい。

ワークシート「理想的な国際協力の在り方」

1年____組____番 氏名_____

<ステップ1> 「理想的な国際協力の在り方」について**あなたの考え**を述べよ。

<ステップ2> **エキスパート活動** (別紙)

<ステップ3> **ジグソー活動** 自分以外の2人のエキスパートの内容を書き留めよ。また、「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考えをまとめよう。

※自分のエキスパート (A・B・C)

1人目 (A・B・C)

2人目 (A・B・C)

「理想的な国際協力の在り方」について**グループの考え**

<ステップ4> **クロストーク** 他の人の発表を聞いて、参考になりそうなことは書き留めよ。

<ステップ5> 今日の授業の内容を踏まえて、改めて、「理想的な国際協力の在り方」について**あなたの考え**を述べよ。

エキスパートシートA「青年海外協力隊員」

1年____組____番 氏名_____

○山本奈央子さん（家政・生活改善）の話

ザンビアではカフエ郡の農業事務所に配属されています。具体的には、農家さんに野菜の育て方やその野菜の調理方法を指導しています。協力隊員になったきっかけは、大学で国際関係を勉強していて、もともと外国に興味があったことです。

日本にいとんでも手に入るし、食べたいものもやりたいことも選択肢がいっぱいあります。でも、ザンビアではやりたくても食べたくてもモノが限られているので、なかなか思い通りに行動や活動ができません。ただ、ザンビアでは、みなさんはここであるものを使っていかに生活を良くしようと考え努力しているので、逆に私もザンビアの方たちから学ばせてもらっています。

この仕事をしていての一番のやりがいは、農家さんの笑顔を見ることです。ザンビアの方たちは本当に明るくてエネルギーで大好きです。そんな彼らの笑顔を見た時に、ザンビアに来て一緒に活動できてよかったなと思います。あともう少しで任期が終わりますが、日本に帰ったら、日本にいながらでもザンビアや世界の人たちとつながるような仕事をしたいと思っています。



○中山かおりさん（小学校教育）の話



アフリカのザンビアの小学校で、算数を中心に教えています。時々、体育や家庭科といった技能教科も教えています。協力隊に参加したきっかけは、小学校2年生の時に中国人がクラスに転校してきたことです。その子は全然日本語が分からなくて困っていましたが、仲良しの友達になり、そこから違う国とか違う文化に興味を持ち始めました。

国際協力に対する最初のイメージは「困っている人を助ける」「助けられる人が助ける」でした。自分がこの立場になってみると、人によっては、別に協力してほしいと思っているわけでも自分たちの生活に不満を持っているわけでもありません。一方的に自分たちが困っている人を助けてあげようというのは国際協力ではないと思います。いわゆる発展途上国と呼ばれる国の人たちは、その国に本当に必要なものは何なのかを自分たちが考えるべきです。逆にそれを助けようと思っている人たち（例えば日本の JICA）は、自分たちに何ができるかだけでなく、そこから自分たちが何を勉強できるか、そこから自分たちが得たものでどう成長できるかというのを考えていくべきです。協力し合ってお互いに勉強してお互い良くなっていくことが国際協力だと思います。

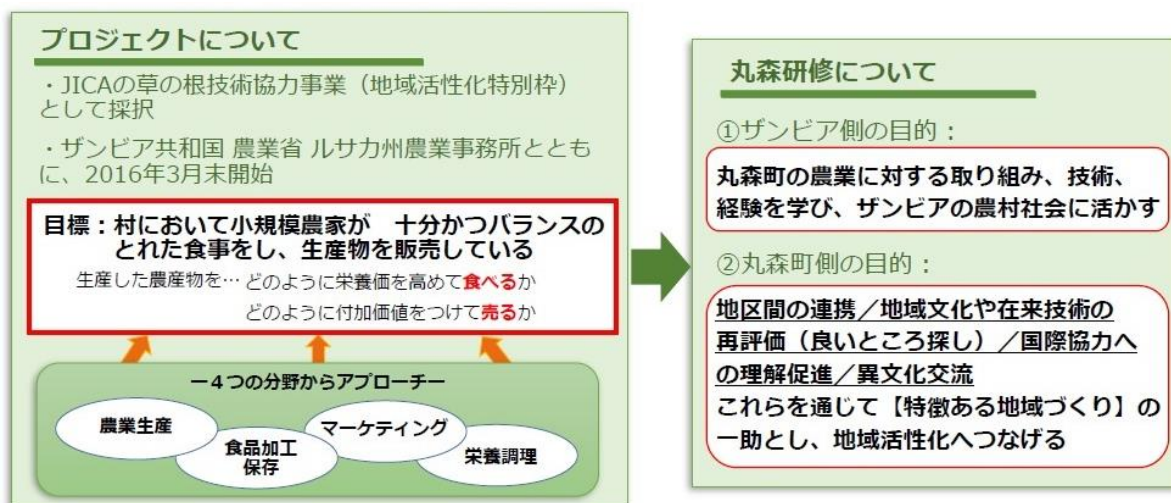
自分が知っている世界はすごい広い世界のうちのほんのちょっとだけです。しかも自分が正しいと思っていることが違うところに行くと正しくないこともある。その逆も多々あります。なので、日本の子供たちにはもっといろんなことを勉強してほしいと思います。ザンビアにいた期間も含めると10年以上教員をやっていますが、それでも自分が知らないことばかりです。自分自身ももっといろんなことを勉強して、自分が得たものを誰かに共有して、どこかで誰かの役に立てたらと思います。

<メモ>

エキスパートシートB「丸森町プロジェクト」

1年____組____番 氏名_____

○プロジェクトの概要



（出典：「丸森ザンビアプロジェクト 第1回丸森研修レポート」）

○小野玲さん（現地調整員）の話

このプロジェクトは宮城県丸森町の農家さんが持っている技術を使ってザンビアの農家の生活を良くするというもので、私はザンビアと丸森町を結ぶ現地調整員という仕事をしています。現地調整員とはザンビア側で何か活動するときにザンビア人の方と一緒に活動の計画や評価を行う仕事です。

この仕事のやりがいは、このプロジェクトでつながった丸森町とザンビアという2つの社会が少しずつ変わっていくのを見ることができることです。丸森町では、ザンビアの方と触れ合って、考え方や価値観を変える人が出てきているし、ザンビアの人たちも、日本の技術や日本人に触れて、違った文化を感じて面白いと言っています。このプロジェクトを続けてザンビアの農家さんの生活が少しでも良くなり、またそれを通じて日本の丸森町の住民の皆さんが活気づいたらいいなと考えています。

ザンビアの人たちと活動をしていて困難に感じることもあります。現地には「シェア（共有）の文化」、すなわち2個以上持っている人からはもらってもいいという考え方があり、もらえるのが当たり前だと思っている人もいます。我々からすると現地の人たちの生活が貧しく見えるため、かつての援助はひたすら物資を提供するだけのものでした。それが現地の文化とまずく組み合わさってしまい、発展の妨げになっていました。やはりいつかは援助が終わり、彼ら自身で彼らの生活できるのが一番いいと思います。そのために、現地の人たちには受け取ったものの背後にある想いや願いをくみ取ってもらい、それに対する感謝の気持ちを持ってもらうことで、彼らの考え方を少しずつ変えていきたいです。また、我々もただ「あげる人」「もらう人」の関係性ではなく、常に彼らからも何かを学び取る姿勢を忘れず、持ちつ持たれつの双方向的な関係性を構築し、その積み重ねがいつか貧困の解決につながればいいと考えています。



<メモ>

エキスパートシートC「多国籍バイオ企業による食糧援助」

1年____組____番 氏名_____

○ザンビアにおける多国籍バイオ企業に関する雑誌記事（一部抜粋）

ザンビアの首都・ルサカ市内を車で走っている時、あるロゴが目に入った。遺伝子組み換え技術で圧倒的なシェアを持つ多国籍バイオ企業、モンサントのロゴマークだ。「なぜここで？」と気になった。

■ハイブリッド種子の実証農場

……よく見ると壁に「デカルブ・ハイブリッド種子」と、トウモロコシを形どったマークが描かれてる。デカルブはモンサント傘下の種子会社だ。「なるほど」と思った。

ハイブリッド種子とは、人為的な交配によって多収性や栽培安定性など優れた性質を実現した種子のこと。ただしその特性は1代限りで、2代目以降は形質が一定しなくなる。ルサカのモンサントの壁には、青々と茂るトウモロコシ畑の写真の横に、6種類のデカルブ種子の品種名と早収性や乾燥耐性、病虫害への強さなどの特徴が列挙されていた。

ルサカ郊外の幹線道路沿いにはザンビアで高シェアを誇る Seed Co はじめ MRI、ZAMSEED、Pannar といった種子会社や品種目を書かれた看板の立った実証農場が並んでいる。田舎町のロータリーに種子会社の事務所があるのも見かけた。聞くと、こうした実証農場では種子会社が種子だけでなく肥料なども提供してくれるのだという。

■「援助」で変質した農業

急激な人口増加と気候変動による干ばつリスクが高まるアフリカでは、食物の安定的な増産が急務となっている。種子会社は、乾燥耐性や収量の安定をうたった種子や肥料の販売で競い合っている。モンサントは 2008 年から、アフリカ農業技術基金や国際トウモロコシ・小麦改良センター、ケニア、南アフリカ、タンザニア、ウガンダ各国の国立農業研究機関とともにアフリカ独自の乾燥耐性トウモロコシ品種を開発する WEMA (Water Efficient Maize for Africa) 計画に参加し、遺伝子技術を提供している。

……アフリカの人はいつから大量のトウモロコシや小麦を食べるようになったのか。調べると、1960 年代末から 70 年代前半の干ばつを機に、食料援助という形で世界市場でだぶついていたトウモロコシや小麦が流れ込み、人々の食生活が変化したという話を聞いた。これらの作物は水不足に弱く、干ばつのたびに不作となり飢餓の原因となっている。また、パンを焼くのに大量の薪が必要なため、小麦食への転換は森林破壊も招いたという。

■環境と経済の両立を

急増する人口を養うため食糧増産は必要だ。しかし、本来人々が食べていなかった作物を作るためにバイオ技術を使うことが、本当にアフリカのためになるのだろうか。

2005 年にケニアの環境活動家、ワンガリ・マータイさんの故郷を訪ねた。そこでは女性が木を植え、在来種の作物を育てることで地域の環境保全と生活向上を目指していた。ハイテク種子は栽培するたびに種や肥料を買わなくてはならない。不作の時は借金としてのしかかる。真の自律を目指すため、マータイさんは在来種にこだわったのだ。……

（出典：中島みゆき（2013.8）「アフリカ「10 億人市場」の素顔③-「自律」の条件」『メッセージ@pen』、綱町三田会倶楽部）



▲ザンビア人の主食「シマ」。トウモロコシを挽いた粉を湯で練り固めてつくる。

<メモ>

ワークシート「理想的な国際協力の在り方」

1年 組 番 氏名

<ステップ1> 「理想的な国際協力の在り方」についてあなたの考えを述べよ。

物を輸出するのみにてなく、技術を伝え

日本人がいなくなるとして、そこから発展させていく

協力の仕方が重要で、考えよう

<ステップ2> エキスパート活動 (別紙)

<ステップ3> ジグソー活動 自分以外の2人のエキスパートの内容を書き留めよ。また、「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考えをまとめよう。

※自分のエキスパート (A・B・C)

1人目 (A・B・C)

JICA. 草の根技術協力事業.

村にいい、小規模農家が十分、バランスのとれた食料で、特産物を販売する目標.

森崎さんに、ザンビアの人は技術で学ぶ

2人目 (A・B・C)

教える

ザンビアの農村社会に貢献.

食料援助. アフリカの植物が育ちにくい、→乾燥に強い、トウモロコシ作成.
(乾燥機)

「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考え

一方的に援助するのではなく、自分達はそこから何かを学ぼうという姿勢を大事にして.

お互いに協力し、両方の国にメリットがあるような関係.

<ステップ4> クロストーク 他の方の発表を聞いて、参考になりそうなことは書き留めよ。

・あげる人-もらう人ではなく、互いに利益があるような関係

・援助を受ける国が自立できるようにしていく.

<ステップ5> 今日の授業の内容を踏まえて、改めて、「理想的な国際協力の在り方」についてあなたの考えを述べよ。

片方が一方的に援助/助けるとして、関係ではなく、双方にメリットのあるように協力できるようにしていく。
援助を受ける国は自立できるように、援助する国は自立を助けるように協力が必要だと感じた。

ワークシート「理想的な国際協力の在り方」

1年 組 番 氏名

<ステップ1> 「理想的な国際協力の在り方」についてあなたの考えを述べよ。

・国どうしか互いの欠けている所、優れている所を生かしながら、
国際協力を行えばいいと思う。

<ステップ2> エキスパート活動 (別紙)

<ステップ3> ジグソー活動 自分以外の2人のエキスパートの内容を書き留めよ。また、「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考えをまとめよう。

※自分のエキスパート (A・B・C)

1人目 (A)・B・C)

・協力して、互いに良くなること → 国際協力
・資源品不足 → アフリカに行き指導を付けて、アフリカの人からも教わる。
・節を大切に何かに使うだけでなく私たちに何か必要 → 大切。

2人目 (A)・(B)・C)

・常に彼らから学ぶ姿勢、お互いの基本の考え。
・総合的な助け合い

「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考え

・互いに良くなるようにすることが国際協力の在り方と大切なから、
相手からも得られることもお互い、お互いの関係が大事ということ。

<ステップ4> クロストーク 他の人の発表を聞いて、参考になりそうなことは書き留めよ。

依存 互いにより、双方向的、積み重ね。
↓
1人限りの種

<ステップ5> 今日の授業の内容を踏まえて、改めて、「理想的な国際協力の在り方」についてあなたの考えを述べよ。

・国際協力の在り方は、互いに良くなることも前提とあるはもちろんだが、
お互い、お互いの関係を大切にして、互いに自立できるように、依存したり、
あることとあることがとても大事だと思います。

ワークシート「理想的な国際協力の在り方」

1年 組 番 氏名

<ステップ1> 「理想的な国際協力の在り方」についてあなたの考えを述べよ。

経済格差 なくそうとすること
そして、互いに支え合う

<ステップ2> エキスパート活動 (別紙)

<ステップ3> ジグソー活動 自分以外の2人のエキスパートの内容を書き留めよ。また、「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考えをまとめよう。

※自分のエキスパート (A・B・C)

1人目 (A・B・C)

お互いに助け合うが大事で、一方的に助けるのは国際協力ではない。
一方的はよくない。

2人目 (A・B・C)

持ちつ持たれつの双方向的な関係を構築。
その積み重ね

「理想的な国際協力の在り方」についてグループの考え

一方的な支援ではなく、双方向的な関係性を築いて
いくのが、国際協力。
双方向的な関係とは お互いに学び合いよくしていくこと。
↓ これが理想的

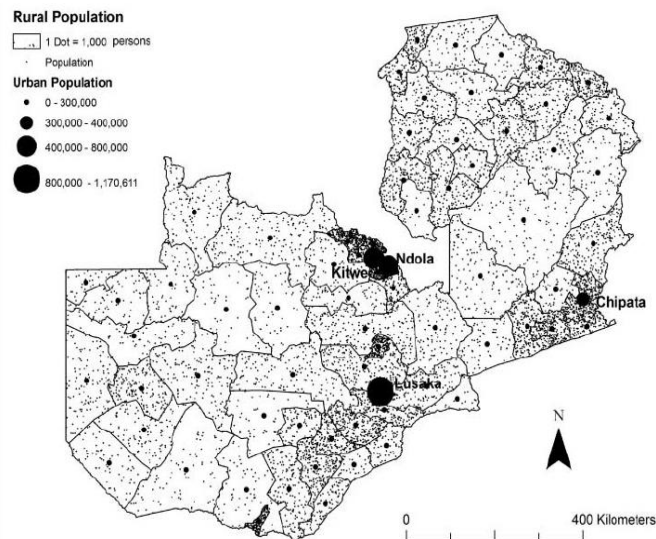
<ステップ4> クロストーク 他の人の発表を聞いて、参考になりそうなことは書き留めよ。

相手国が自立しているよう、文化環境を尊重。
自国の文化を教える、その国の今後を考える。
本当に必要なものを支援。
win win

<ステップ5> 今日の授業の内容を踏まえて、改めて、「理想的な国際協力の在り方」についてあなたの考えを述べよ。

理想的な国際協力とは、一方的に必要なものを支援するのではなく、
相手国の文化や環境を尊重し、相手国が今後自立できるよう支援し、
自国も相手国から色々なことを学ぶ双方向的な関係(win win)こそ
理想的な国際協力であると私は考える。

A



B



C

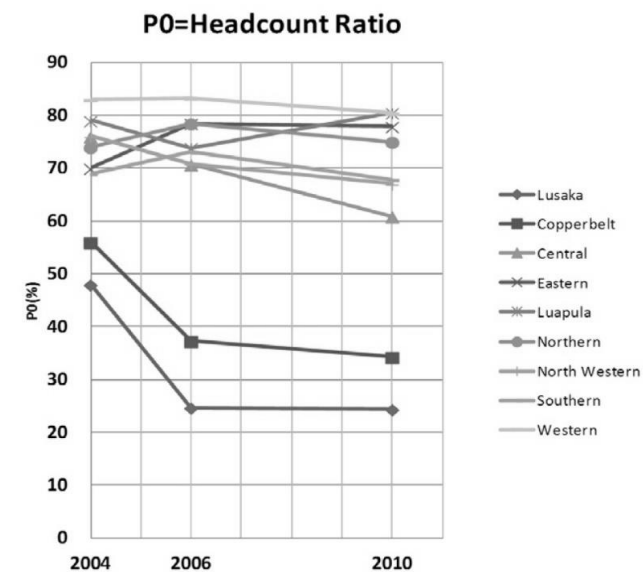


図 III-5 ザンビアの地域別貧困率（2004～2010 年）⁶¹

↑これを印刷し、カード形に切って生徒に配布

学習プロセスシート「アフリカの植民地化と独立後の課題」

1年____組____番 氏名_____

＜学習前＞「貧困」について、あなたの考えを述べよ。

＜授業③：____月____日（____）＞
「貧困と____」について、あなたの考えを述べよ。

＜授業④：____月____日（____）＞
「貧困と____」について、あなたの考えを述べよ。

＜授業⑤：____月____日（____）＞
「貧困と____」について、あなたの考えを述べよ。

＜授業①：____月____日（____）＞
「貧困と____」について、あなたの考えを述べよ。

＜授業②：____月____日（____）＞
「貧困と____」について、あなたの考えを述べよ。

＜学習後＞「貧困」について、あなたの考えを述べよ。

＜自己評価＞学習の前後で自分の考えがどのように変わったか。一連の授業を振り返ってどんなことを感じるか。疑問点等も含めて自由に書きなさい。

学習プロセスシート「アフリカの植民地化と独立後の課題」

1年 組 番 氏名

<学習前>「貧困」について、あなたの考えを述べよ。

「貧困」により、飢えや病に苦しむ人が多い。これを解決するためには、その国だけでなく、他国の力を借りる必要があると考える。

<授業③: 11月15日(水)>

「貧困と未来」について、あなたの考えを述べよ。

先進国である日本ですら抱えている貧困問題は、世界の国々も抱えているはずだ。ある程度安定した国でも解決できない問題を途上国が解決できるとは思えない。土地も教育も未整備で人口も多い国の貧困は解決されず、経済格差は広がる一方だと思える。

<授業④: 11月17日(金)>

「貧困と国際協力」について、あなたの考えを述べよ。

貧困に苦しんでいる国には、やはり、他国の援助が必要だと思える。そして、その援助はただ大量の食料を手入れはいいわけではないと思える。相手国が自立できるように、開発援助力をする必要がある。そのためには、その国の文化を尊重する必要があると思える。

<授業⑤: 11月20日(月)>

「貧困と自分」について、あなたの考えを述べよ。

貧困を解決するために世界で決めているSDGs(目標)を達成するための17個の課題を解決するために自分ができることはそんなに多くないことを知った。ただ、同じ目的の人間が集まった企業などに参加することで、自分にも何かできるのでは、と思った。

<授業①: 11月13日(月)>

「貧困と歴史」について、あなたの考えを述べよ。

「貧困」に苦しむ国が多いのは当時の列強が積極的に領土を広げようとしたことが原因で、その支配役となつたのが植民地の原形の資本力支配であったと考えられる。

<授業②: 11月14日(火)>

「貧困と歴史」について、あなたの考えを述べよ。

植民地が独立できたとしても、旧宗主国によってモノカルチャー経済を強要されたり、インフラの未整備があったりして、本当の意味で、独立することは難しいと感じた。現在の独立国も、他国に依存していることから、このことがよく分かる。極度の貧困状態の人口がまだ69%なことに驚いた。

<学習後>「貧困」について、あなたの考えを述べよ。

「貧困」が世界的な問題になっていることには、帝国主義の国々による植民地支配や、モノカルチャー経済の強要といった、歴史的な背景があったと知り、この長い間で大きくなった「貧困」という課題を自国の力で解決するのはかなり難しいと感じた。そこで、やはり他国の力が必要だと思えた。しかし、先進国が一方的に物資や技術を貧しい国に与えることが理想の国際協力ではないことを知った。相手国が自分たちの足だけで歩んでいけるように、援助する国は、その国の文化を尊重し、考えながら援助していかなければいけないと思える。また、SDGsを達成するためには、もともと「貧困」について、多くの人に認識してもらう必要があると思える。なぜなら、「貧困」に対して、個人でできることは、とても少なく、効果が小さいからである。

<自己評価>学習の前後で自分の考えがどのように変わったか。一連の授業を振り返ってどんなことを感じるか。疑問点等も含めて自由に書きなさい。
学習前は「貧困」についてはアバウトな知識しかなかったが、学習を通して「貧困」がかなり難しい問題だということを知った。日本の中で過酷にしているだけではない、1ミリも知れていないことがあると知り、世界のスケールの大きさを感じた。